



ドアを見た

川崎ゆきお

「重厚なドアですか」

「丈夫なドアじゃない。木でできてはいるがね。凹凸がかなりある。模様にはなっていないが、入れ子状の枠や飾りのようなものがある。丁度目の高さより少し高いところに獣の浮き彫りがある。ここは真鍮かなにかだ。金属的な光だ」

「古城の貴賓室のような」

「そうだね。だが、ビル内なので、天井はそれほど高くはない。だから、ドアの高さもそこそこだ。観音開きじゃなく、手前へ引くタイプだ。押してもいい。まあ、入るときは、ドアの向こうに人がいるかもしれないので、引くがね」

「出るときもそうでしょ」

「そうだね。廊下に誰かがいるかもしれないからね。しかし、ドアの前に四角い柱のようなものがある、ドアの前に少しスペースがある。だからいきなり廊下じゃない」

「はい」

「それが出るんだよ」

「出にくいと」

「出るんだ」

「廊下に出るんですね」

「いや、ドアが出るんだ」

「はあ」

「そういうドアが出るんだ」

「ほう」

「古いビルじゃない。そんな装飾もののドアなどない。そこは柱と柱の間で、ただの壁だよ。壁はコンクリートで、向こう側は偉いさんの部屋だ」

「どういう話でしょうか」

「だから、ドアだよ。ドアが出る」

「ドアの幽霊ですか。それとも秘密の扉」

「そうだ」

「簡単に言われますねえ」

「偉いさんの部屋が並んでいる。その中ほどだ。その壁にはドアなどない。ちょうど間ぐらいだ。柱の位置からいくとね。だから、村山さんと土岐さんの間ぐらいだ」

「重役室ですねえ」

「そこで考えた」

「はい」

「お二人の部屋の間空いだにスペースがあるんじゃないかと」

「あ、はい」

「それで、聞いてみましたよ」

「結果は」

「壁が分厚い程度だと」

「でも隙間があり、そこに小部屋があるとしてもですよ。廊下側にドアが浮かんだり消えたりなんてしませんよ」

「そうなんだ」

「夢の話ですね」

「いや、それなら最初から、夢だと断るよ」

「じゃ、何ですか、その重厚なドアは」

「私の幻覚だろうねえ」

「医者へ行きましょう」

「ああ、しかし、そういう症状を借りて、私に何かを見せようと、あるいは何かを知らせようとしているんじゃないかと」

「まさか、その分厚い壁に人が」

「本当に壁だろうか。隠し部屋じゃないのか」

「そこに誰かを閉じこめて、そのまま」

「それは昔の怪奇映画だ」

「じゃ、何ですか」

「これを見た人は私だけのようだ」

「じゃ、やはり医者へ」

「そうなんだが、不思議なこととして済ませたい」

「あ、はい」

「特に私、変なところはないだろ」

「そうですねえ。妙なドアが見える程度で」

「一つぐらい、いいだろ」

「え」

「そんなことがあっても。一つぐらいなら」

了